



第 1 回

「クリスティーナの世界」

アンドリュー・ワイエス

パネル、テンペラ

81.9×121.3cm 1948年

ニューヨーク近代美術館蔵（アメリカ）

窓の向こう側

一枚の絵を前に、こころ静かに立ち尽くす。少しずつ、日常の雑音が消えてゆく——わたしの毎日のなかにある小さな悩みや心配なこと、遠くのサイレンの音に、人々の話し声、流れてくるエンドレスな情報——そのあとに残るのは、絵のなかに流れる静けさだ。静けさによく耳を澄ませば、心地よく襟元をかすめる風の音が聴こえてくる。風は辺りの草を揺らし、さわさわとくすぐったいような、小さなざざ波を草原に広めてゆく。太陽は肌を温め、時の止まってしまったような午後を、諦めたようにそっと見守る。

「クリスティーナの世界」

たった一枚の絵に、永遠と想える時間と空間が含まれている。わたしはいまある身のまわりを消し去って、そのなかに入り込みたい衝動にかられる。それはきっと一枚の絵であって一枚の絵ではなく「窓」なのだと思ふ。その窓の向こうには、いまわたしがいる世界とは違う時間が流れている。いまわたしがここで生きているように、絵のなかの世界も静かに

に生きているのだ。

足の不自由な女性はか弱く、実には力強い。おそらくそこに悲壮感はなく、彼女は自分の底からみなぎる力を感じている。わたしにはそう想える。彼女が見る先の家は、足が不自由な彼女にとって遠く感じているのだろうか。こころを整えて、彼女が感じているものを感じ取るべく集中してみる。彼女と一緒に、さらさらの木綿のような風や、草原の音に耳を澄ませてみる。

彼女は自由を感じているのではないだろうか。彼女はこの瞬間、足が不自由ないつもの自分ではなく、自由気ままにそよぐ風であり、生を香らせる草であり、どこまでも続く蒼い空なのではなからうか。疑う余地もなく、彼女は抜けるような空や大きな景色や気ままな風の一部であり、その一体化した繋がりがから溢れんばかりの生命力が溢れてくる。その瞬間はこの一枚の絵のなかで永遠となる。そして窓をのぞく私たちに、言葉では語り尽くせないほどの力強さを分け与えてくれるのだ。

エッセイスト・作家。
1971年米国サンフランシスコ生まれ。
父は、指揮者の小澤征爾。
上智大学比較文化学部卒業後、メトロポリタン歌劇場演出家・デイヴィッド・ニース氏の助手としてオペラ演出を学ぶ。著書に『おわらない夏』（集英社）、『蒼いみち』（講談社）、『しずかの朝』（新潮社）など多数。

小澤征良
おざわ・せいら